2016年度　　CB

小　論　文

注　意

1. 問題は全部で6ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. 解答用紙(その1)はマーク・シートになっている。HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

以下の文章を読み，設問に答えなさい。なお，問1・問2・問3の解答は解答用紙（その2）に，また問4の解答は解答用紙（その1）に記入すること。

「たしかにわれわれのこの国については」とぼくは言った，「ほかの多くの点でもこの上なく正しい仕方で国を建設してきたと思うけれども，しかしぼくは，とりわけ詩（創作）についての処置を念頭に置いてそう言いたい」

「とおっしゃいますと，どのような？」と彼はたずねた。

「詩（創作）のなかで真似（まね）ることを機能とするかぎりのものは，けっしてこれを受け入れないということだ。つまり，どうもすべてそうした類いのものは，聴く人々の心に害毒を与えるもののようなのだ。聴衆のほうで，それらの仕事がそもそもどのような性格のものであるかという知識を，解毒剤としてもっていないかぎりはね」

「いったいどのようなお考えで」と彼はたずねた，「そう言われるのでしょうか？」

「では聞いてくれたまえ。というよりむしろ，答えてくれたまえ」

「たずねてください」

「それならば，われわれは次のことから考察をはじめることにしようか――いつもやっている探求方法を出発点としてね。というのは，われわれは，われわれが同じ名前を適用するような多くのものを一まとめにして，その一組ごとにそれぞれ一つの〈実相〉（エイドス）というものを立てることにしているはずだから。どうだ，わからないかね？」

「わかります」

「ではいまもやはり，そのような〈多くのもの〉のうちで，どれでも君の好きなものを取り上げることにしよう。たとえば，もしよければ，こんな例で考えよう――寝椅子や机は，数多くあるはずだ」

「ええ，むろん」

「ところがそれらの家具について，〈実相〉（イデア）はということになると，二つあるだけだろう――寝椅子のそれが一つと，机のそれが一つ」

「はい」

「ところで，これもまたわれわれのいつもの説ではないか，――すなわち，いまの

二つの家具のそれぞれを作る職人は，その〈実相〉（イデア）に目を向けて，それを見つめながら一方は寝椅子を作り，他方は机を作るのであって，それらの製品をわれわれが使うのである。他のものについても同様なのだ，とね。なぜなら，〈実相〉そのものについては，職人のうち誰ひとりそれを作ることはないのだから。どうして作ることができよう？」

「けっしてできません」

「それではひとつ，次のような製作家についても，君はその職人を何と呼ぶか考えてみてくれたまえ」

「どのような職人ですか？」

「それぞれの種類の手仕事職人が作るかぎりのものを，すべて何でも作るような職人のことだ」

「なんとまあ腕の立つ，驚くべき男ですね！」

「まあ待ちたまえ。いますぐにもっと感心するだろうから。いいかね，この同じ手仕事職人は，すべての家具を作ることができるだけではなく，さらに，大地から生じる植物のすべてを作り，動物のすべてを——自分自身をも——作り，さらにこれらに加えて，大地と，天空と，神々と，すべての天体と，地下の冥界にあるいっさいのものを作るのだよ」

「ほんとうに驚きました」と彼は言った，「大へんな知恵者ですね」

「信じられないかね？」とぼくは言った，「では聞くが，君はそのような職人は，いかなる意味においても存在しえないと思うのか？　それとも，ある意味ではいま言ったすべてのものを作る人がありうるが，ある意味ではありえないと，こう思うのかね？　君は気づかないだろうか——君自身でも，ある仕方でならば，そういったもののすべてを作ることができるだろうということに？」

「ある仕方とは，どのような？」と彼はたずねた。

「むずかしい仕方ではないよ」とぼくは答えた，「いろんなやり方で，すぐにでもできることなのだが，まあいちばん手っとりばやくやるには，鏡を手に取ってあらゆる方向に，ぐるりとまわしてみる気になりさえすればよい。そうすれば，君はたちまち太陽をはじめ諸天体を作り出すだろうし，たちまち大地を，またたちまち君自身およびその他の動物を，家具を，植物を，そしていましがた挙げられたすべてのもの

を，作り出すだろう」

「ええ」と彼は言った，「そう見えるところのもの（写像）を，しかしけっしてほんとうにあるのではないものを，ですね」

「うまい！」とぼくは言った，「議論のために必要適切なことを言ってくれた。というのは，思うに，画家もまたそのような製作者だろうからね。そうだね？」

「ええ，むろん」

「しかしながら，ぼくの思うに，君はきっと画家が作り出すものはほんとうのものではないと，主張するだろう。ただし，ある仕方では画家もやはり寝椅子を作るのだがね。そうではないか？」

「ええ」と彼は言った，「彼もまた，寝椅子と見えるもの（写像）を作るのです」

「では寝椅子作りの職人の場合はどうだろう。ついさっき君は，こう言っていたのではなかったかね？　彼は〈実相〉を――これをわれわれは〈まさに寝椅子であるところのもの〉と言うわけだが，その〈実相〉を――作るのではなくて，ある特定の寝椅子を作るのである，と」

「ええ，そう言っていました」

「それなら，彼が〈まさにそれであるところのもの〉を作るのではないとすると，彼が作るのは真の〈あるもの〉だとはいえなくなって，〈あるもの〉に似てはいるけれども，ほんとうにあるのではないような何かだ，ということになるだろう。寝椅子作りの職人の製品にせよ，他の何らかの手仕事職人の製品にせよ，それが完全にあるものだと主張する人があれば，その人の言うことは真実ではないだろう」

「けっして真実ではありません」と彼は答えた，「いやしくも，この種の議論に親しんでいる人々の判断するところでは」

「それなら，そういう製品とても真実在にくらべれば，何かぼんやりした存在にすぎないということになっても，けっして驚かないようにしよう」

「ええ，けっして」

出典：プラトン『国家』藤沢令夫訳，岩波書店（一部省略）

問 1

本文中の語り手――「ぼく」――の主張を 200 字以内の日本語で要約しなさい。

問 2

問 1 で要約した「ぼく」の主張に対する論理的な反論を 200 字以内の日本語で述べなさい。

問 3

問 1 と問 2 を踏まえた上で，あなたはどちらの立場に立つか表明し，それを現代の具体的な事例をあげながら 300 字以内の日本語で展開しなさい。

問 4

次の文章の空欄 $\boxed{1 \mid 2}$ ～ $\boxed{19 \mid 20}$ にあてはまる最も適切な語を，下の語群の中からそれぞれ選び，その番号をマークしなさい。ただし，

1．同じ番号の空欄には同じ選択肢が入る

2．語群には正解と無関係な選択肢も含まれている

3．一桁の番号の選択肢を選ぶ場合は，十の位に「0」をマークすること

凡例　空欄 $\boxed{21 \mid 22}$ の解答として選択肢 4 を選ぶ場合→ 04 とする

21	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨●
22	①②③●⑤⑥⑦⑧⑨⓪

プラトンの時代の古代ギリシャにおける「国家」とは，$\boxed{1 \mid 2}$ 国家のことである。それは集住する市民の共同体であり，「ポリス」と呼ばれた。主たるポリスのひとつ，アテネでは，紀元前 7 世紀に王制から貴族制へ，その後さらに $\boxed{3 \mid 4}$ 制へと移行したが，ペルシャ戦争において下層市民が活躍して発言力を高めたため，前 5 世紀には全市民による $\boxed{5 \mid 6}$ $\boxed{3 \mid 4}$ 制が確立された。これは民会や民衆裁判所をもつ先進的なものであったが，しかしこの「全市民」からは女性や在留外国人などが排除されており，また奴隷はそもそも「市民」には含まれなかった。

このように大きな限界はあるものの，市民ないし人民・民衆（demos）＋支配・権力（kratia）としての [3 | 4] 主義は，紀元前の古代ギリシャ人によって発明されたと言える。

これに対し，現代の [3 | 4] 主義は，古代ギリシャにはなかった基本的人権や，自由，平等の概念を前提としている。それらの新しい概念の起源は，直接的にはヨーロッパ [7 | 8] 思想に求められる。

近代以前には，国王や貴族たちが身分制を基礎に権力を独占し，民衆に重税を課したり，従わない者を投獄したり，勝手に戦争を始めたりと，民衆の利益を考慮しない一方的な政治が行われた。このような政治を [9 | 10] 政治と言う。こうした政治に対する不満が高まり，近代ヨーロッパに新しい政治・社会思想と体制が生まれたのである。

政治体制としての近代国家は18世紀に相次いで成立した。その成立をもたらした事件とは，[11 | 12] 独立戦争と，[13 | 14] 革命である。

イギリスの思想家ジョン・ロックは「個人の生命・自由・財産などは誰も侵すことができない」とし，基本的人権の思想を基礎づけた。彼はまた，「人々の自由を守らない政府は倒してもよい」という革命権・抵抗権の思想も唱えた。[11 | 12] 独立宣言は，このロックの影響を大いに受けている。

一方，[13 | 14] 革命の理論的支柱となったのが，ジャン＝ジャック・ルソーの「国の権力は本来人民のものだ」という「人民 [15 | 16] 」の思想である。たび重なる戦争や宮廷の浪費によって財政難に陥り，その収拾のために開かれた三部会から階級闘争が激化したが，最終的には市民側が，特権階級が支配する旧体制（アンシャン・レジーム）を打破し，国王を処刑して，「人間と市民の権利宣言」（人権宣言）を採択した。

これらに共通するのは，[15 | 16] が王・貴族から市民・人民に移ったという事実である。こうした体制変革のことを一般に「[17 | 18] 革命」と言う。

「権力者もまた法に従わなければならない」という「[19 | 20] の支配」の原則は，[9 | 10] 政治や独裁政治に陥らないために重要な原則である。

語群

1．間接	2．民主	3．啓蒙	4．産業
5．市民	6．主権	7．集中	8．神権
9．絶対	10．専制	11．代議制	12．直接
13．田園	14．都市	15．農村	16．法
17．僭主	18．アメリカ	19．イギリス	20．イタリア
21．スペイン	22．ドイツ	23．フランス	24．ロシア